

拔髮

小川未明

青空文庫

ブリキ屋根の上に、糠ぬかのような雨が降っている。五月の緑は暗く丘に浮き出て、西と東の空を、くつきりと遮さえぎった。ブリキ屋根は黒く塗つてある。家の壁板したみも黒い。まだ新しいけれど粗末な家であつた。家の傍には、幹ばかりの青桐あおぎりが二本立たつている。若葉が、びらびらと湿つぽい風に揺れている。井戸がその下にあつて、汲手くみてもなく淋しい。やはり雨が降っている。この家には若い女が一人で住んでいるのだ。

私は、この若い女を見たことがない。暮春ぼしゅんであるけれど、寒い日であつた。私は、窓から頭を出して、黒い家を見た。ひよろひよるとした青桐が、木のように見えぬ。人の立つているようだ。此方向こちらむきの黒い壁板には一つも窓がなかつた。彼方あちらには窓があるかも知れない。私は、まだその家を廻つて見たことがない。ただ、若い女が住んでいるということ聞いた。

「女は、どうしているだろう。」と思つた。女は、琴を弾かない。また歌わない。いつもあの黒い家には音がなかつた。私は、どうかして、井戸に水を汲みに出る姿でも見たいと思つたが、ついその女の姿を見たことがない。

私は心で、いろいろその女を想像して見た。或時は、痩せた青い顔の女だと思つた。或

時は、もう寡婦で艶氣のない、頭髮の薄い、神経質な女だと思った。私は、女のことを考えているうちに、日が暮れた。

やはり雨が降っている。こう幾日もつづいて降ったら皆な物が腐れてしまいうだろう。

「そうだ。皆な物が腐れてしまつたら……。」と思った。

黒い夜だ。腐れて毒と化したような夜だ。暗い色は漠としていただけ。黒い色には底に力がある。私は暗い夜でない黒い夜だと思った。私は、深い穴を覗くような気がした。冷たな舌でなめるように風が当る。もう黒い家は分らぬ。あるけれど分らぬ。私は不安であつた。けれどやはり私は窓から頭を出していた。

明る日も雨だ。私の空想はもはや疲れた。朝から、青桐に来て鳥が止っている。茫然と窓に凭れて、張り付けたような空を見ていると、鳥が、時々頭を傾げて何物かに瞳を凝している。私は、手を上げて逐うのも物憂かつた。自然に逃げて行くのを待っていると、鳥は昵として動かなかつた。

私は、窓を閉めた。急に室の中が暗く陰気となつた。暫くして、また窓を開けて見ると、まだ鳥が青桐に止っていた。……とうとう日が暮れてしまう。

或晩ふと眼を醒すと、窓の障子が明るかつた。戸を開けて見ると、雲が晴れて、空は暗

碧^{んべき}だ。古沼に浮いた鏡のように青い月が出た。銀光が戦^{おの}き戦^{おの}き泳いで来る。幾万里の間音が亡びて空は薄青い沈黙である。二本の青桐も目醒^{めざめ}たように立っている。黒い家もその儘^{まま}だ。ただ湿^ぬれたブリキ屋根に青い光が落ちて、東、西の黒い森にも青みを帯^おんだ光りは流れていた。

私は暫らく、窓に凭^よつて青い月の光りを受けた黒い家を見ていたが、いうにいわれぬ悲しさがシミジミと胸に湧いた。

「若い女！ まだ見ぬ若い女！」ああ、その若い女が恋しい。私はなぜ今迄その女を見なかつただろう。私は余り考え過ぎた。考え過ぎているうちに春も過ぎてしまった。この青い月の光り！ もう春でない。淡い夏が来たのでないか。夏？ そうだ夏だ。病的な、暗愁の多い春は去^{さつ}て、淡々として白い夏が来たのだ！ しかし、もう遅い。春は去てしまった。私は、過去の邪推、疑念、無駄な空想を呪った！ 後悔した！ 私は始めて、若い女は唇の紅い、髪^{かみ}の緑の、眼の美しい、処女であつたということ……そしてその女は、恥^{はずか}しくて姿を隠していたのでないかということ考えた。

醒^{よめ}めよ。春は逝^ゆいてしまった！ といわんばかりに月の光りは淡かつた。

幾日か降つた雨、それは恋しい、懐しい、春の行くのを泣いた泣いた女の涙であつただ

ろう……私は、その夜後悔と慚愧ざんきに悶もだえた。悶もだえた。

白い雲が、日の光りに輝く青葉の上を飛んでいる。緑葉は一夜のうちに黒ずんだ。青桐の葉は大きく延びた。その蔭が地の上に落ち、はつきりと刻きざんだ。井戸の釣瓶つるべの縄はいつの間にか切れて、もはや水を上げる役にたたない。ブリキ屋根には赤い錆が出て、黒塗の壁板したみには蛞蝓なめくじの歩いた痕が縦横についていた。私は、黒い家の周囲まわりを廻った。果して窓があつた。東向になつている窓が閉つていた。私は、窓の傍そばに近づいて、戸を開けて見た。裡うちは暗くて、人の住んでいる気はいもない。物の腐れた臭いが激しく鼻を衝いて来る。僅わずかに射し込んだ日の光りで、狭い、室の中が見えたが、畳の上には、女の抜髪ぬけがみが一握ひとつか程落ちていた……。

若い女は、もはやこの家に住んでいなかった。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集2 小説集※【#ローマ数字2、1-13-22】」講談社

1979（昭和54）年5月6日第1刷発行

初出：「読売新聞」

1909（明治42）年6月6日号

※表題は底本では、「抜髪《ぬげがみ》」となっています。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

抜髪

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>